
空を翔るツバサ

海無 七河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を翔るツバサ

【Zコード】

Z8550Y

【作者名】

海無 七河

【あらすじ】

宇宙からやってきた生命体『トロイ』との激戦区である第三大陸。

そこにある学園に通う少年は、翼を持ち、空を飛ぶ少女に出会い、拉致される。

彼の連れていかれた先は、極一部の人間しか知らない組織『ツバサ』だった。

そこで彼は『トロイ』に関する重大な秘密を知る。

F1.i 朗读 1 空飛ぶ少女（前書き）

もちろんこの物語はフィクションです。

それでは行きます！

Ready! F1.i 朗读!

F1.i g n t 1 空翔る少女

今から二十年ほど前、五つの大きな大陸を持つ惑星に新たな生命体が現れた。

虫のような外見の奴らは宇宙からやってきて、特殊な光線で人間を、建物を 全てを焼き払った。

人間はヤツらに『トロイ』の名をつけた。

今もなお、戦いは続き、数年ほど前からその激戦区は、科学文明が発達した第三大陸に移っていた。

× * × * × * × * × *

時刻は昼の十一時二十三分。

僕は空き教室でノートパソコンを見ていた。

窓の外には人を器用に避けて走り回る影。

ボーッとそれを見ていると、ノイズ音と共にパソコンから声が流れてきた。

『拓海、東は使えないぞ。どうする?』

窓から見えた走り回る人影 竜騎の声だ。

僕は少し考えてから、

「上からは？虎月、行つてたつけ？」

『おお！それがあつたか・・・行つてみる！』

そんな返事が返ってきて通信は切れた。

きつと成功かな。

そんなことを思いながら十五分くらい待つていると、

「ただいま～つと。今日の戦利品だぞ」

竜騎ともう一人 虎月が教室に入ってきた。

二人は僕の前にランチボックスが三つ入った袋を置いた。

そう、これが僕達の狙つてた物。

この学園では三ヶ月に一度、学食で限定十食特別メニューが販売される。

求める生徒数は約百人。

僕達もその中の一部だ。

運動は得意じゃない僕は一人に走るのを任せて、こうして指示を別場所から出していった。

「それにしても、拓海が指示するようになつてから勝率が上がる上

がる！「

「やうだな。今じゃ俺らも学園中の有名人だ」

竜騎と虎月が戦利品を食べながらそう言った。

その時の僕は「そんなことないよ」と言つだけだった。

「有名人」

この言葉が僕の運命を左右するなんてその時は知らなかつたんだ。

× * × * × * × * ×

「はい、次を竜騎＝アレルヤ」

午後の最後の授業。

「え～・・・あ～・・・わかりません！」

弾かれたように立ち上がった竜騎は大きな声でそう言った。

先生は何も言わず 否、心なしか呆れたような顔で教室内を見回し、

「・・・（ん？）」

「では代わりに拓海＝エイリアス」

目が合つた僕を指名した。

「はい」

電子黒板に歩み寄り、答えを書き込む。

「正解。では今日はここまで」

ちょうど時間が終わり、先生は教室を出ていった。

「は～・・・俺、やっぱ歴史嫌いだ」

先生が教室から出た後、後ろの席の竜騎がつぶやいた。

「じゃあ、どうして歴史科なんか入ったの？」

第三大陸学園には二つの科がある。

歴史科　この世界の大陸史そして『トロイ襲撃』を中心とした宇宙史を学ぶ。

芸術科　美術や音楽のエキスパートを育成する。

そして航空科　その名の通り、パイロットや技師、通信士など航空に関わる人材の育成をする。

「だってよ、うちの親も兄弟もみんな第三大陸学園の出身だからさ・

・」

竜騎の両親はパイロットと整備士。

二人の兄は芸術科と航空科にいる。

「もうじやなくて、拓海が言つてるのはびりして航空科や芸術科にしなかつたのかつて」と

いつの間にか虎月が僕の隣に座つていた。

「・・・俺に入試をパスできるほどの芸術的センスと技術が備わつてると思うか?」

「思わないな」

虎月がバツサリ切り捨てる。

ヒドいとは思つたが、僕もそつ思つてたから黙つておこう。

「ましてや、厳しいと噂の航空科に俺が入るわけやねーだろっ!」

竜騎はそう言って机をバンッ、と叩いた。

航空科はパイロットや技師を育成するだけあつて特殊なカリキュラムが多い。

ついて行けなくなつて中退したり転科する人も少なくない。

「名前は『龍』の『騎』十、で勇ましいのにな

「やかましい。」

一人が取つ組み合いを始めてしまったので、僕は巻き込まれないようそつと、窓側に寄つた。

外では何台もの飛行機が空を飛んでいた。

あれは全部航空科の物。

初めて学園に来た時は驚いたけど、今はすっかり慣れてしまった。

「あれ・・・？」

毎日見ているせいが、航空科じゃなくても生徒達は飛行機の見分けがつくようになっていた。

いくつかの中型戦闘機と小型旅客機の中に一つ、見慣れない形をつけた。

明らかに他の物よりサイズが小さい。

それに、何かが太陽の光を反射してキラキラ光っている。

戦闘機は光らないような塗装をされていて、旅客機もそこまで光を反射しない。

あれは何だ・・・？

トロイ？

いや、違う。

あれは教科書で見たトロイじゃない。

僕は思わず窓を開け、身を乗り出した。

風が教室内に入ってくる。

いつの間にか竜騎と虎月も手を止め、窓の外を見ていた。

クラス中が静かだった。

その影はだんだんはっきりしてきて・・・。

「え・・・！」

信じられない。

「マジかよ」

「えっ」

教室内が驚きの声で満ちる。

理由はその影にあった。

人が空を飛んでいる。

ガラスのように透明な翼を持つ、女の子がこちらに向かってくる。

女の子は僕に向かつて手を伸ばした。

眩しい蒼の瞳で見つめてくる。

その姿に吸い寄せられるかのよひこ、『ばばも彼女に手を伸ばしていた。

「あなたが、拓海＝エイリアス？」

僕の手を取り、強気そうな女の子は真っ直ぐに見て、そう訊いた。

呆然としていた僕は我にかえつて、

「えー？ あ、うん」

とわけのわからない返事をした。

女の子は満足そうに笑って、

「今から私達と一緒に来てちょうだい！」

そんなことを言つた。

「…………えーと……『達』？」

いや、セレジヤないだら自分。

発した言葉はそんなコメントをつけたくなるけど・・・。

何だこれは。

『うううううなつてる？

誰か説明して！

混乱していた僕はそんなことしか言えなかつたのだ。

「そんなわけで・・・えいつ！」

「え？」

何がそんなわけ？

そう訊こうとした瞬間だった。

腕を強い力で引っ張られ、

体が宙を舞つた。

・・・誰の？

僕のだ。

「うわあああああ！」

どうやら女子に投げられたみたいだ。

つて、冷静な分析してる場合じゃない！

情けない悲鳴を上げながら僕は外に飛び出す。

えっちらと待つ・・・!

落ちる、落ちるから!

重力に従つて体が落ちていく中、思わず目を開じると、

「おわっ・・・!」きなり投げるな!」

再び腕を掴まれ、引っ張られ、投げられる。

「うぐっ・・・!?

体が固い場所にぶつかった。

扱い雑だなあ。

そんなことを思つて目を開けると、僕は航空科所有の小型飛行機に乗つていた。

「え?と・・・?

状況がわからない・・・。

立ちぬくしていると、やたら背が高い男子が、

「悪いな。突然」

苦笑いで話しかけてきた。

「俺は一年の那千つていうんだが、お前は?」

「拓海ですけど……これは一体?」

すると、開きつ放しだった飛行機のドアからあの透明な翼が飛び込んだ。

女の子は僕を見るなり、

「『ツバサ』にようござー。」

そんなことを言った。

F-1.i ggt 1 空飛ぶ少女（後書き）

* 後書き劇場*

竜騎「大変だ！拓海が拉致られちました！」

虎月「でもあの子、誰だったんだ・・・？」

竜騎「まさか拓海のカノジョー...？」

虎月「それは無いと思つ・・・でもなんか秘密がありそうだ」

竜騎「秘密？」

虎月「そんなわけで次回、

『F-1.i ggt 2 ツバサと翼』

お楽しみに」

竜騎「つておー！」

* * * * *

そんなわけではじめまして。ついでにお世話になつてます。

海無七河です。

新連載はSFにしてみました。

楽しんでいただけたら幸いです。

個人的なお気に入りは那千と虎月（笑）

ではどうぞこれからもよろしくお願ひします！

F1ight 2 ツバサと翼（前書き）

+ 前回までの話 +

空を飛ぶ少女に拉致られた拓海。

着いた先は・・・

Ready Flight!

Fight 2 ツバサと翼

「『ツバサ』によつてや。」

少女はそんなことを言つた。

「は？」

「お前なあ……」

額に手を当て、那千せんは小さくつぶやいてから、

「ここはお前と同じ一年の斎。航空科パイロット部所属……一応」

斎と呼ばれた子の着ている服は航空科のつなぎ。

でも……。

「一応……？」

「それはこれから説明するわ」

飛行機が地面に近づく。

一人の後について外に出ると、僕がさつきまでいた歴史科の校舎は
かなり遠くに見えた。

「おー、置いてくぞ

「えつ・・・・待つてくださいー。」

一人の背中を見ていないと、自分はどうしているかわからない。

そんなくらい、航空科の校舎は入り組んでいた。

× * × * × * × * × *

五分くらい経つただろうか。

斎さんと那千さんの足が一つのドアの前で止まった。

他のドアと違ひ、見るからに頑丈そうなドアだ。

斎さんがゆっくりと、ドアを開けた。

そこには、

「・・・・何、これ・・・」

ちよつと薄暗い室内には大型のモニターが三方の壁に付いている。

その前にはたくさんのボタンやスイッチが光るキー ボード。

その前には数人の人が座って、画面を見つめている。

部屋の中央には大きな白の円卓があつた。

「・・・・」

日常生活ではお田にかかるないものばかり。

僕はボケーッと突っ立つてゐるしかなかつた。

「驚いた？」

斎さんが満面の笑みで顔を覗き込んでくる。

「驚きますよ・・・」)は一体・・・？」

僕の質問に答えたのは、

「それにはちよつと長い説明が必要になるな」

那千さんのそんな言葉だった。

* * * * *

今から一十年ほど前、この惑星に新たな生命体が第一大陸で確認された。

虫のような姿をしたヤツらは、顔 額のあたりからコンクリートをも貫く光線を放つた。

大陸中が混乱し、犠牲者は数万人。

人間はこの生命体を「トロイ」と名付け、研究を進めていく。

それから八年後 今から十一年前、人間は対トロイ用の武器と、光

線に耐えられる特殊素材を開発した。

それと同時にヤツリは伸びやつしきた。

「・・・といひ辻は歴史科なら授業でやつしたか」

「はー」

「じやあ続けるべ」

武器と飛行機を駆使して人間は戦うが、戦況はよくならない。

ところが、ある兵士が一体のトロイの腹の中心を攻撃すると、そのトロイは石になつて碎けて消えた。

これが弱点だ。

しかし、攻撃するには戦闘機では的が小さすぎる。

そこで新たに生まれたのが、

「対トロイ歩兵だ」

「それは見たことがあります。街をよく巡回してこますから」

すると那千さんは蒼さんを振り返つて、

「じゃあ、歩兵はコレを持つてるか?」

カツン

円卓の横に置いてあつた翼を軽く叩いた。

答えはもうひるん、

「持つてない・・・です」

「それがこの続きだ」

歩兵の活躍により戦況は少し良くなつたが、何千体のトロイを倒すにはまだ足りなかつた。

ヤツリは空を飛ぶ。

では、歩兵も飛べばいいじゃないか。

「それで特殊素材を使ってこの翼が開発されて、新しへばと呼ばれる兵士が現れた」

やつとわかつた・・・でもこの話だと・・・。

「まるで、斎さんが空兵みたいな感じだ」

「お、さすが。その通りだ」

へ？

斎さんを見るけど笑つてこるだけで何も言わない。

「ここは世界初の空兵が所属する大陸軍特殊戦闘部の司令部だ」
通称『ツバサ』

「ツバサ……」

まずい。

頭が・・・追いついていかない！

「大丈夫？」

斎さんが話しかけてくるけど・・・。

「・・・『めん・・・全然わかりません

「だよな。突然言われたってな」

那千さんは同情的な視線で僕を見る。

「とりあえず・・・何で、僕がここに・・・？」

「食堂の特別ランチ」

「は？」

斎さんは僕の前に立つと、

『『昼休みの戦』連勝記録への陰の暗躍者、歴史科一年、拓海』工
イリアス。ちなみに入学試験の成績はトップクラス。運動はあんま
りだけど・・・』

ビシッと僕を指差した。

「私達ツバサは、あなたの作戦を立て、兵士を動かす能力に可能性を感じるわー！」

「いや、兵士じゃなくて一般生徒だ」

那千さんのツツツツも耳に入っていない。

「ていうか何でそんなこと！？』

今にも踊り出しそうな斎さんを横田に、

「当たり前だろ。連勝記録を持つ一年なんて史上初だ。有名にもなるや」

「ついでに成績一位はどの科でも有名人になれるわよ」

言つた那千さんと斎さんの言葉に、

昼間に聞いた竜騎の話を思い出す。

有名って本当だつたんだ・・・！

「そんなわけで、あなたにはツバサに入隊してもいいわー！」

「いやいや、待って！そんな突然・・・ていつか本当に僕でいいんですか？」

人違ひじやなくて・・・？

混乱とそんな心配で、慌てて口を開く。

でも斎さんは、

「あくまでも可能性があるって話。役にたちそうになかったら雑用をしてもらひうか、脱退してもらうわ」

勝手すぎるー。

那千さんは、

「無理しなくていいぞ」

つて言つてくれるけど・・・。

僕がものすごく迷つっていた、そんな時だつた。

『一いちから、大陸軍。二いちから、大陸軍。第三大陸学園西方にトロイを確認。ツバサは至急、出動準備を開始してください』

突然けたたましいサイレンの音と、そんな放送が室内に響いた。

まさか・・・！

「出動みたいね。どう、見学していく？」

斎さんはそれだけ言い残すと走つて部屋を出て行く。

那千さんと僕が残された。

「ま、ちょっと見ていいよ」

そう言つて僕を巨大モニターの前に連れて行く。

「那千さんは行かないんですか？」

「今日はそんな大規模戦じゃなさそうだし、俺にあの翼は使えないからな」

× * × * × * × *

突然モニターが明るくなつて、画面上に外の画像と地図が映る。

それと同時に数人の人間が部屋に入つて来て、たくさんのスイッチやボタンを操作します。

『パワー エナジー 補給完了。出動準備完了しました。パイロットは出動態勢に入つてください』

『了解』

何が何だかわからないままに事は進んでいく。

そして、スピーカーから斎さんの生き生きとした声が聞こえてきた。

『斎＝フレンチエ、出動します！』

画面の向こうで何かが光る。

翼を広げ、真っ直ぐにトロイへと向かつた斎さんだ。

「これから斎はトロイに接触し、ヤシラが弱点を晒した時を狙つ

那千さんは画面を見つめたまま解説してくれた。

『トロイは三体。全て小型の物です』

「よし、いつも通りに落ち着いていけ!」

那千さんの指令を聞き、斎さんは一瞬速度を落とすと、

『行きます!』

次の瞬間、すばやくスピードでトロイに近づく。

トロイの赤色の目が斎さんをとらえた。

ヒュン!

何人の命を奪う光線が次々と放たれる中、斎さんはダンスをしているかのように翼をきらめかせて飛んでくる。

『さて、何か気づいた事は?』

食い入るように画面を見ていると、突然那千さんがそつに言った。

『気づいた事?・?・?・?』

もつ一度よべ、トロイの様子を見る。

斎さんが右に行けば体を僅かに左に向け、左に行けば右に向け……。

「弱点を正面にしていいない・・・・・！」

「その通り。ヤツらは本能的に弱点を隠している・・・つまり、やれより早く斎が動けばいい」

「でも、今もかなりのスピードで動いてますよね・・・」

既に僕の手には追えないぐらいのスピードでトロイと斎さんは動いている。

「戦闘機には無理だな・・・・でもそれができるのが空兵 斎だ」

F1.i gant 2 ツバサと翼（後書き）

* 後書き劇場*

拓海「これから斎さんはどうなるんですか！？」

那千「まあ落ち着け・・・斎はこれから変形する」

拓海「変形ー？」

那千「そうだ。翼が第二形態に変わり、斎は巨大ロボットへと変化する・・・つて冗談だからな」

拓海「ロボットか・・・凄い・・・！第三話が楽しみですー！」

那千「おーい、冗談だぞ・・・聞いてねえな」

拓海君は純粋な子。

そんなわけで第一話をお送りしました。

斎さんの華麗な活躍・・・うまく書けてない（笑）

脳内補完の方をお願いします（ワイ）

では次回も是非ご覧下さい。

F1.i 80Ct3 金の紋章（前書き）

行つをまーす！

Ready Flight!

F1.i 0073 金の紋章

『そろそろ行きたいんだけど…。』

スピーカーから斎さんの声が聞こえる。

「そうだな……エナジーも溜まつたし。いいぞ！」

那千さんの指示にスピーカーの向こうで斎さんが笑う気配がした。

『じゃあ……。』

その瞬間、

「え…？」

僕の口から驚いた声が出る。

消えた。

突然、画面上から斎さんが消えた……！

「え…？ 斎さんは…？」

思わず那千さんに詰め寄ると、

「落ち着けって……別に斎は消えちゃいない」

でも……。

「高速で移動しただけだ」

「あつ・・・」

改めて画面を見ると、トロイも消えたターゲットを捜し、視線を彷徨わせている。

『エナジー・パック装填完了！突撃っ！』

僕たちの目の前を翼が翔る。

「オオツ

そんな轟音が聞こえそうな、凄まじいスピードだった。

斎さんはトロイの頭上に現れた。

トロイはまだ気付いていない。

手の中の特殊レーザー銃が火を噴いた。

一本の光の一つはトロイのハハのような羽に。

「トロイの動きを封じた・・・？」

「そうだ。これでトロイの動きは格段に鈍くなる

もう一つの光は、的確に腹の中心を捉えた。

・・・・

空氣を切り裂くようなトロイのかん高い鳴き声が響いた。

トロイは右になり、碎け散つた。

『一体撃破!』

斎さんは残りの一體に近づく。

でも、

「トロイが退いてく・・・」

トロイは攻撃をすること無く、退いていった。

「何だつたんだ・・・?」

「多分リーダーが撃たれたから退いたんだろう・・・斎、お疲れ」

『帰還します』

画面から斎さんの姿が消える。

那千さんが僕を見た。

「どうだ?これがツバサの戦いだ

入るか?

那千さんの田がそう問い合わせる。

僕が役に立てるなんて、思つてない。

でも、興味があつた。

トロイとこう生き物に。

ツバサとこう存在に。

空を翔る翼に。

だから、迷わなかつた。

「入ります。僕の力がどのくらい役に立てるかわからないけど・・・

」

「そつか・・・ほいつ

「うわっ

金色の物体が宙を舞い、手の中に収まる。

見ると、

「バッジ・・・?

「それは大陸軍の階級章だ。ま、この隊に階級なんてあつて無いようなんだけどな」

「階級章・・・

剣の模様が刻まれた階級章を裏返せば、

【一等兵】

と刻まれている。

もひ、あとには戻れない。

「よろしくお願いします！」

こうして僕は、大陸軍特殊戦闘部『ツバサ』の一員となつた。

× * × * × * × * ×

「・・・で、ここが格納庫」

ツバサの一員となつた僕は、帰還した斎さんに航空科を案内してもらっていた。

それにも・・・。

斎さん、タフだなあ。

さつきまでトロトイと戦つてたとは思えない元気やし、僕は心の中でそう思った。

「璃亞さん、いますか～？」

飛行機の間を進みながら、斎さんが誰かを呼ぶ。

「こ～のよ～ー今手が離せないんだけどね～ー！」

叫び声が返ってきた。

「とこ～いことは整備中ね・・・」

またしばらく歩き、羽の部分が分解されている飛行機の前で斎さんは止まった。

「ま～よ、今出る・・・って斎か」

汚れで真っ黒なつなぎを着た女人が現れた。

「拓海、ひかり璃里ちゃん。三年生で、整備士なの」

「もしかして、ツバサの新入りかい？」

「はい！ 拓海といいます」

「やうか。あたしは璃里。ツバサの整備士をやつてるんだ。ようし

く

× * × * × * × *

そして、僕たちは司令部に戻つて来た。

「お～拓海、ちよつといこか？」

「何ですか？」

那千さんは分厚い紙の束を僕に渡しながら、

「早速だけど明日の放課後からこいつくれるか？」

「航空科ですか？多分大丈夫だと思いますけど・・・」

補習は必要無いし、放課後は暇だ。

「そんじゃ頼む。あと、できるだけコレ、読みどいてくれ

コレって・・・コレ？

さつき渡された紙の束に視線を向ける。

「『ゼット』と『ページ』はありますよね・・・」

鞄に束をしまい込み、僕は歴史科の校舎に足を向けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『『トロイは街にあるセンサーで感知し、軍本部に情報が送られる。

基本的に小規模戦の場合は歩兵もしくは空兵、大規模戦の場合は加えて戦闘機数台が出動する』

・・・ふつ

貰った資料を机に置き、一息つく。

膨大な紙の束のやつと半分を読み終わった。

資料にはトロイや武器、隊についてなどが書かれていた。

その中にはあの翼の解説もついていた。

人体着脱式飛行装置【HF-01】。

重量五?。

最大全長約二メートル。

箱のような装置をリュックのよつに背負つと、翼が開き、飛行可能になる。

翼は特殊素材製でトロイの攻撃を跳ね返すことができるのである。

「うひしてみるとあの翼は今、この世にある対トロイ科学の結晶のような物だった。

「僕はどうすればいいんだらう・・・・」

「この未知の世界で。

× * × * × * × *

「うんにうは～・・・・」

放課後、何度も迷いながらツバサの司令部に着いた。

「おー。早速だがこっち来てくれ」

ノートパソコンの前に座る那千さんに呼ばれた。

今日は昨日より人が少ない気がする・・・。

「今日は斎さんは？」

「飛行訓練だ。それより、今日からお前にせこれをやつてもいい」

やつて画面を指される。

画面には、

「シュミレーショングン」

「やうだ。これからトロイとの大規模戦を想定したシュミレーショングンをしてもらひ」

パソコンに映っているのは自軍の兵士、戦闘機の駒。

そして、トロイ。

僕は兵士と戦闘機を動かし、全てのトロイを倒せばこいつ。

「最低でも自軍の損害ナシ、一十回で撃破な」

「わかりました」

スタートをクリックすると、画面が動き出した。

五分後。

「ああっー。」

僕の情けない声が司令部に響いた。

画面には【LOSS】の文字が・・・。

「なんだよ。せめて十分は粘れよ

那千さんはそう言つけど・・・。

これ・・・難しい！

あの毎休みとは違う。

敵の動きが予測できない。

これだ、と思う作戦も潰される。

気がつけば自軍の兵士の数は〇に近かつた。

「・・・何か、難しくないですか」

「当たり前だ。これは過去の大規模戦を元に作ったシミュレーションだからな」

これが・・・トロイとの戦い・・・。

甘かつた。

これは遊びじゃない。

それを僕はわかつてなかつたんだ。

× * × * × * × * × *

司令部を出て、廊下を歩く。

外では色々な種類の飛行機が飛んでいる。

もちろん戦闘機の姿も。

あの飛行機も戦うんだ。

「僕は・・・」

もう逃げる」とはできない。

でも・・・。

正直言つて自信が無い。

僕が軍隊を指揮すること。

トロイと戦つことに。

「・・・」

翼が夕焼けに反射し、虹色の光が窓から差し込む。

斎さんが飛んでいた。

ゆっくりスピードを上げ、急上昇。

そして急降下。

一回転して、急旋回。

舞つよひこ、優雅に飛び回る。

「そりだ・・・僕は逃げられない」

この翼に魅せられてこの隊に入った。

それなら、翼に最高の戦いをさせるのが僕の役目だ！

僕は来た道を戻って、司令部のドアを開けた。

* 後書き劇場*

拓海「そつこいえば斎ちゃんって力持ちなんだね」

斎「……え？」

拓海「五?の翼を背負つてあんな風に空を飛び回るなんて・・・・・
凄い力だよ!」

斎「・・・そつ・・・・・・それはビーム」

拓海「えつー?何でビームが行っちゃうのー?」

拓海は女心を知るべきだ!
そんなわけで第三話です。

『氣づけば那千の出番が斎より多くなつてN/1ステロー。

気をつけよつ・・・・・。

次回もぜひひらくやせー!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550y/>

空を翔るツバサ

2011年12月5日21時48分発行